

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730324

研究課題名（和文） グローバル化時代の都市における「多様性」の諸相と  
「まちづくり」の比較研究研究課題名（英文） Comparative study about several aspects of “diversity” in  
globalized cities and “machizukuri” movements

研究代表者

五十嵐 泰正（IGARASHI YASUMASA）

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：80451673

研究成果の概要（和文）：現在、日本の諸都市では、地域イメージ戦略を核としたまちづくり運動が盛んであり、多くの場合その中では、地域の固有性や多様性を称揚する理念が謳われることが、グローバルな流動性を前提とした現代においては、それらは非常に大きな困難を抱え込んでいる。このパラドクスとそこからの脱却の模索を、千葉県柏市における数量調査・インタビュー調査や東京都上野地区におけるインタビュー調査などから明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Nowadays, “Machizukuri” or town development focusing on area image strategy is very popular among Japanese cities, and most of them are advocating an emphasis on the local endemism or diversity. However, in the age of global flowability, these values run into logical difficulties. I demonstrated these paradoxes and local attempts against these through the quantitative and qualitative research in Kashiwa, Chiba and qualitative research in Ueno, Tokyo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：まちづくり、都市、グローバル化

## 1. 研究開始当初の背景

現代の都市で行われるまちづくり活動や都市イメージ戦略の中で、「多様性」や「固有性」というスローガンは、基本的には肯定的な響きをまとっている。しかしながら、それぞれに特有の事情を抱える各都市において、その概念はそれぞれに別の意味合いを帯びており、地域内の「多様性」と地域間の「多様性」の緊張関係など、内部に矛盾をはらむ

形で複雑にねじれているが、その内実が明らかにされないまま称揚すべき価値として語られている傾向がある。この点を、都市社会学のみならず、都市地理学やカルチュラル・スタディーズ、文化経済学や都市計画学など隣接領域に蓄積されてきた議論を援用しながら、批判的に考察していく必要があると思われた。

## 2. 研究の目的

研究期間の3年間をかけて、諸領域にまたがった理論的蓄積を検討してゆくことを基盤としながら、濃密さと幅の広さを両立させた実証的な比較研究を実施することで、「多様性」という現代の都市が称揚する傾向にある価値の内実を明らかにし、それぞれの都市が置かれた局面における目指すべき「多様性」のあり方を検討していく、それによって、筆者が専門とする都市社会学にとどまらず、まちづくりや都市経営戦略にかかわる諸分野に対して、大きな理論的・経験的貢献をなすことを目的とした。さらに、筆者が参与観察する地域団体の活動の企画・運営などを通して、本研究での研究成果を上野や柏などの実際のまちづくり戦略に、フィードバックすることを重要視した。

## 3. 研究の方法

本研究の基礎となる参与観察の対象としたのは、1) 柏において、1998年の結成以来一貫してストリート・ミュージシャンや「裏柏」の古着店などと連携して、柏駅周辺の若者サブカルチャーの資源を使ったまちづくりイベントを推進してきたストリートブレイカーズ、2) 2004年に東京都の「観光まちづくり推進モデル地区」に上野が指定された際の受け皿ともなった、上野を担う「旦那衆」の集まりだと自他共に認めている上野商店街連合会および上野観光連盟、の各団体である。目指しているまちづくりの方向性だけでなく、財政規模や構成員の性格も大きく違う両組織であるが、双方において申請者は、研究開始時点で既に内部者として一定の立場と役割を築いて参与しており、研究期間中のスムーズな参与観察を遂行できる素地を作っていた。

(1) 初年度の平成20年度は柏での調査に重点を置き、上記ストリートブレイカーズの各種イベントの企画から運営までに積極的に参加し、柏の既存商店街の店主、若手起業家、ストリート・ミュージシャン、同団体のメンバーとなっている市民、そして同団体をバックアップする柏市商工課の職員など、同団体に関連するさまざまな人々がどのような地域アイデンティティを抱き、あるべき柏の都市像をいかなるものと考えているのか探った。その中核となる調査は、ストリートブレイカーズが千葉県より委託され、実際に申請者がコーディネイターとして中心的に関与した、地域活性化プラットフォーム事業「アートでつなぐまちづくり」の参与観察として行った。

参与観察による質的調査に加えて、当

該プラットフォーム事業の評価として行われた各種市民イベント会場等での質問紙調査を企画・作成・配布し、約1000件の回収数を得た数量調査が、大きな成果を生むことになった。

(2) 続く平成21年度は、東京都上野での調査に重点を置いた。上野商店街連合会および上野観光連盟の会議に参加し、メンバーの店主たちに聞き取り調査を進めると同時に、同年7月に行われた東京都議会議員選挙において、上野を地盤として立候補した都議会議員候補の選挙事務所での調査を行い、この地域のコミュニティの流動化・液状化の状況について、選挙活動や投票行動の変化を通じて分析した。

## 4. 研究成果

(1) 前記の柏市における地域活性化プラットフォーム事業で行った質問紙調査の二次分析からは、地域の固有性や多様な文化的アメニティの魅力に拠らずに、地域内でのパーソナルなコミュニケーションを媒介として地域への愛着を醸成している郊外住民の実態が窺われた。これは、地域の固有性や多様性の追求を無条件に称揚し、「どこにでもある街」を忌避する傾向の強い、これまでの日本のまちづくりに関する理論的・実践的な議論に、一石を投じるものとなった。

(2) 上記したようなコミュニケーションは、人のつながりが希薄であると論じられがちな郊外都市においても、従来地域コミュニティと最も無縁に生きていると考えられてきた若年層も含む多様な年齢層で、局所的に活発に行われていることが確認できた。ただ、それらのコミュニケーションを可能とする「場」は、一部のアクターによる献身的ともいえる努力によって維持されているという課題を抱えていることも、聞き取り調査や参与観察から明らかになった。

(3) 東京都上野地区での店主への聞き取り調査からは、地域コミュニティや伝統的な「上野／下町らしさ」の称揚およびそれによる地域活性化と、都市の多文化化という二つの価値が衝突してしまう局面について理論的な整理を試みた。その際に特に、望まれざる「多様性」として、商店街で槍玉にあげられるニューカマー外国人に対してことさら強い反発を抱く在日韓国・朝鮮人の店主層からの聞き取り調査が、問題の核心は人種・エスニシティの差異ではなく、流動性の高さそのものだという把握するう

えで、重要な意味を持った。

(4) 東京都議会議員選挙に関する研究では、上野・浅草を中心とする台東区における選挙活動のスタイルや投票行動の変化を起点に、液状化する地域コミュニティの現状について分析した。また、こうした状況で行われる地方選挙の現状を打破するものとして期待される、いわゆる「ネット選挙」については、そもそも地域情報化によってコミュニティ外の人々を再包摂することは難しいことから、積極的な政治参加を促す影響は限定的なものにとどまるものと分析した。

(5) 上記のような柏および上野での調査と比較検討することを視野に、宮城県岩沼市、同仙台市、群馬県大泉町、同長野原町、同前橋市などにおいて、地方都市の空間編成についての視察調査を行い、その成果をアウトリーチ活動のひとつとして、雑誌『POSE』における記事にまとめた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1) 白石壮一郎、塩原良和、五十嵐泰正ほか9名(うち8番目)、「グローバリゼーション、移動/定住」『KG/GP 社会学批評』4号、75~97ページ、2011年、査読なし。

2) 五十嵐泰正、「北の「荒野」を往く 成長の爪痕と向き合うドライブ紀行」『POSE』vol.7、72~92ページ、2010年、査読なし。

3) 五十嵐泰正、「もうひとつの「希望は、戦争」」、『オルタ』2009年9-10月号、32~35ページ、2009年、査読なし。

4) 五十嵐泰正「郊外(的)なるもの」『TOKIO-LOGY サロン』森記念財団HP内、[http://www.mori-m-foundation.or.jp/seminar/tokiology/20090710\\_suburbs.pdf](http://www.mori-m-foundation.or.jp/seminar/tokiology/20090710_suburbs.pdf)、2009年、査読なし。

5) 五十嵐泰正、「ノスタルジー・ブームと00年代の「下町」」、『社会学ジャーナル』33号、107~122ページ、2008年、査読なし。

[学会発表] (計4件)

1) 五十嵐泰正、塩原良和、稲津秀樹ほか8名「グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在」日本社会学会、2010年

11月6日、名古屋大学。

2) 五十嵐泰正「地域イメージ」、コミュニティ、外国人」、筑波社会学会、2010年7月17日、筑波大学東京キャンパス。

3) 五十嵐泰正、堀越清孝、富井久義ほか7名「サブカルチャー、地域意識、ジモトつながり：郊外の現在」、カルチュラル・タイプーン2009、2009年7月5日、東京外国語大学。

4) 五十嵐泰正、遠藤哲夫「都市の隙間—く貧乏くささ>の居場所をめぐって」、シンポジウム「場所の力—歩きながら考える」、2009年3月7日、大阪市立大学都市研究プラザ。

[図書] (計5件)

1) 五十嵐泰正「選挙カーとtwitterのあいだ」加島卓、若林幹夫ほか30名(うち29番目)『フラットカルチャー：現代日本の社会学』遠藤知己編、せりか書房、377~384ページ、2010年、査読なし。

2) 五十嵐泰正、川端浩平「「空間」が変わる」荻野達史、西村純子ほか33名(うち26番目)『社会学入門』塩原良和、竹ノ下弘久編、弘文堂、222~235頁、2010年、査読なし。

3) 五十嵐泰正「「地域イメージ」、コミュニティ、外国人」原知章、塩原良和ほか8名(うち4番目)『多文化社会の〈文化〉を問う—共生・コミュニティ・メディア』岩渕功一編、青弓社、86~115頁、2010年、査読なし。

4) 五十嵐泰正「グローバル化とパブリック・スペース—上野公園の90年代」山下範久、佐藤俊樹ほか16名(うち11番目)『戦後日本スタディーズ 第3巻：80・90年代』北田暁大ほか編、紀伊国屋書店、189~206頁、2008年、査読なし。

5) 五十嵐泰正「「場所の力」とどうつきあうか」上田假奈代、原口剛ほか19名(うち19番目)『こころのたねとして 記憶と社会をつなぐアートプロジェクト』こたね制作委員会編、特定非営利活動法人コロールム、246~279頁、2008年、査読なし。

[その他]

ホームページ等

<http://www.trios.tsukuba.ac.jp/Profiles/0001/0002679/profile.html>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

五十嵐 泰正 (IGARASHI YASUMASA)  
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准  
教授  
研究者番号：80451673